
FINAL DAY ~ サイゴノジカンニナニオモウ.....

ACCORD

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FINAL DAY ～サイゴノジカンニナニオモウ……

【Nコード】

N4679D

【作者名】

ACCORD

【あらすじ】

最後の日……それは唐突に訪れ、誰もその日を最後の日だとは思わない。でも、もし、最後の日を知ることができたら、あなたは何をしたいですか？そんな感じのことがいいなと思って書いたのに、いつの間にか主題からは反れていたACCORDの2008年度学校文集投稿作。

「ただいまー……」

ドアを開けながらけだるい声で言う。

自分以外の人間が住んでいない部屋だとわかっていても、そう言うってしまうのは、やはり一応は親を持つ一人の人間としての性なのだろうか？

——俺は県内のある大学に通う大学生。だが、別に優秀な成績を修めているというわけでもなく、かといって単位が怪しくて追われているというわけでもない。
要するに、平々凡々な人間というわけだ。

昨日……正確に言えば今日も大学の友人のアパートの一室で夜通しの中国語講座会。

あ、一応俺は理系なんで、外国語の学習は基本以外要らないということは前もって理解してくれ。

ま、特に大勝ちしたわけでも大敗したわけでもないから、結論から言つと、ただの時間の無駄だった。

強いて言うなら体力を払って馬鹿騒ぎによる精神的興奮を買ったというくらいか。

それで帰宅した今の時刻は午前五時。

最初に戻るが、この時間は一般的にはただいまという時間には遅すぎる時間なのだろう。

「眠……」

幸い、《まだ》五時だ。今日の大学の講義は九時からで、大学まで行く時間などを考慮しても八時までは寝れる。

そう考えるや否や、俺は部屋に常時置いてある布団にダイブする。もう秋も終わりに近いからか、布団は冷たいが、それもまた良い心地良さが感じられる。

そう思っや否や、俺の意識は瞬く間に暗い闇に堕ちていった。

「……んっ、よいしょ……っ……」

私は開いていたその窓からその部屋に侵入する。

念のため言っておきますけど、もちろん泥棒なんかじゃありません。それに今時の泥棒は、こんな古臭い手ではなかなか侵入しませんよ。しかも二階の部屋になんて。

（ふーっ、二階って、結構低いと思ったのに意外と高いんだなー、疲れちゃったよ）

ドアは以外にも鍵がかかっていたので、窓から侵入せざるをえなくなっちゃったからね。

とりあえず部屋に侵入。

と、それと同時に《背中にある大きな羽》が小さくたたまれる。

先輩の話だと、修行すればもつと高くまで飛べるらしいんだけど、今の私には三メートル、飛べて四メートルが限界。

私はまだこの仕事について三ヶ月ちょっとしか経ってないからね、修行どころじゃあないですよ。

大変なんですよー、人間関係。

「うっんっ……」

突然、部屋の住人でもある男の人が寝返りを打つ。

……いけないいけない、ちゃんと仕事はしなきゃ！

私はその人に近づき、顔を確認すると、持ってきた書類の写真の顔と照らし合わせる。

「うんっ、間違いない！」

前の仕事では出現するところを二回間違えた上に、日にちまで間違えちゃうという超大ミスをしちゃったけど、今回は一発で目的の

人物のところに出現したっ！

うんうん、我ながら、大きな大きな一歩だよっ！

そう思っているうちに、また男の人は寝返りを打つ。

私はもう一度、その男の顔を見る。

「……ふふっ、かわいい寝顔……」

（……ホント、《変わんないね》……）

そう思いながら頬を指でつつく。

細身な身体の割にはぷにぷにした、女の子みたいな頬。

（こうしてるのも、何年ぶりだろう……）

「んんっ……」

すると、男は目を覚ました。

私は驚いてすぐさま指を話してあとずさる。

何というか、うん。沈黙。

私は何も言えないし、男の人は男の人で、私をずっと見つめている。

「ど、どもー……おはようございまーす……」

とりあえず、この沈黙という最悪の状況は何とかしようと思った私は、とりあえずこの場に最適なんじゃないかという言葉を投稿かける。

男は私を指差して口をパクパクさせている。

いや、正確には私の背中の中、か。

「な、なああああああっ！」

そして、私を指差したまま大声を上げた。

「な、なああああああっ！」

一眠りして目を覚ました俺は、起きるなり隣人迷惑になりそうなほどの大声を上げた。

でも、わかってくれるだろう？

起きたら自分の横に女がいたんだぜ？

しかも羽までついていらっしやるし。

嗚呼、これは由夢なのか、しまった字違い、夢なのか？

相当動転してるな、俺。

「あのー、夢じゃないですよー……」

俺の考えたことまでわかるんですかこの人は？

「あ、いま『何で俺の考えたことがわかるんだ？』って思ったでしょ？ 顔に全部出てますよー」

ああそか、そういえば昔よく言われたな、「お前は嘘ついても顔が嘘つけないからすぐばれるね」って。

いやいや、今はそれどころじゃない！

「何なんだよお前はっ！ 勝手に俺の家に侵入してっ！？」

「侵入とは酷いですね……せめて勝手に立ち入っつてと言ってもらった方が聞こえが良いですから、そうしてもらえませんか？」

「どうでもいいわそんなことっ！」

「そうですね、どうでもいいです。あ、とりあえず確認させていただきます。あなたは雲戌亥策君で間違いないですね？」

急に真面目口調になる。

「あ、ああ」

特に間違ったことを言っているわけではないので、うなずく。

「というわけで、急なんですけど今からものすごいことを言っちゃいたいと思います！」

なんかすごい話に発展するようだ。

一応真面目に聞く体制をとる。

「今日の午前八時二十分、あなたはこの二十一年という短い生涯を閉じてしまうのでーっす！」

「……………はあ？ 死ぬ？ 俺が？」

「はいっ！それはもう！ 間違いなく！ 神様がお決めになったことですから間違いなどであるはずがありません！」

自信満々に言う彼女だが、正直なところ、俺にはそれが嘘としか

思えない証拠があつた。

「なあ……、今、何時かわかつてるか？」

「ええ！ ほら！ 時計を見てください！ 十時……二十二分、十六秒……あ、十七秒……」

「いや、秒数まで数えなくていい、そんなのすぐ変わっちゃう。……で、何か感想は？」

俺はそう言つて彼女のほうを見る。

彼女は俺を指差し、口をパクパクさせている。

「な、何で生きてるんですかぁーっ！」

そして、これまた近所迷惑な大声を上げた。

まあ、こんな時間にはアパートには二部屋となりの就職先見つからないとかで悩んでいるパソコン中毒者が一人いるだけだろうから、問題ないだろうが。

「何で生きてるんですかぁーっ！」

私はさっきのさっくんと同じような大声を上げる。

何で何で？ 調書には今日の八時二十分に死ぬって書いてあつたはずなのに……

私は慌てて調書を確認する。

（えーっと、名前、雲戌亥 策、年齢二十一歳、死亡日時は十一月二十七日、午前八時二十五分……）

「あー」

「何だ？」

「今日って、何日でしたっけ？」

私はまさか、という思いでその質問をする。

「十一月二十六日だけど」

どーん！ 予感的中！

ここに来るまでは万時うまくいっていたのにー

そつえば今日の獅子座は肝心なところでのミスに注意、だった

っけ……

……何でこんなときだけテレビの星座占いが当たっちゃうのー！？
いつもだったら「今日はこれまでにないラッキーデー！」っていう
日に引ったくりに遭ってそれをその辺の自転車持ってた人の自転車で
追いかけてそれで電柱衝突して自転車の前輪吹っ飛んで自分も吹っ
飛んでそれを発見してくれたどこかの漫画家さんと運命的な出会いを……
って、何で最近読んだ漫画の内容が混ざっちゃってるの！
まあともかく、これは大変だ。一度出てきてしまった以上、私は
この人が死ぬまで見取ってあげなくてははいけない。先輩の話だと、
どうやらこれが非常に面倒らしい。

それもそうだ。《死ぬまで見取ってあげる》ということは、《死ぬ
まで目を離してはいけない》ということ。

ということだからつまりは……

さっくんの《すべてを見ちゃう》という訳で……

うっっ……（赤面）、持つかなあ、私？

先程から、さっきの天使っぽい女は俺から目を反らしたまま一人
身悶えている。

いったい何を考えているのだろう？ とは非常に気になるところ
だが、俺からしてみても、俺はこれからどうすればいいのか全く見
当がつかない。

（……ん？）

突然、頭の中に何かを通った気がした。

（そっぴや……なんでこんなに冷静なんだろ、俺？ なんか、まるで
知り合いと一緒にいるような感じがするな……）

そのまま、彼女のことをしばし見つめる。

（何だろ……こいつがこうやってしている姿がいつも見ていたかの
ように思えてくる……）

「ねえねえ！ 私はどうしたらいいんですかーっ！」

そんなことをも考える隙を与えさせないかのように女は俺の襟首をつかんで引つ張ってくる。

俺の首が性能が悪い人形かのようにカタカタと前後に動く。

「あーそんなのっ、俺につ、言われてもっ、何の処置もっ、できないっ、からっ、とりあえずっ、手を離してくれっ！」

「あ、はい」

即効で手を離された。反動で俺は床に尻餅をつく。

「イテテ……急に離すなよ……」

俺は打ちつけた尻を擦りながら立ち上がる。

「まあそれはともかくとして、結局のところ俺はどうなるわけ？」

「えーっと、率直に言うなら、予定通りに死にます。つまりは明日ですね！」

「……そう笑顔で言われてうれしいことじゃないかな……」

俺は笑顔でそう言ってきた女に対して言う。

「あれ……」

「ん？　どうかしたか？」

「いえ、何でもありません……あつ、そうだ！　自己紹介がまだでしたね！　私、ティンって言います。新米ですけど一応てんかいはいわたし天界橋渡使やつてます！」

なるほど、ま、要するに天使っていうところか。

「ご丁寧にどうも。俺は……って、さっき言われたよな」

言い出してから気づく。

「はい、雲戌亥さっくんですよー！」

「……何で君付けなんだ。しかも微妙に本名に君付けしてないし……」

「えー、さん付けって面倒じゃないですかーそれに一日あなたと一緒に過ごすんですから、親しみを込めたほうが……と思ひましてー」

さっくん……か。そう呼ばれると、否応にもアイツのことが頭の中に浮かぶ。

しかしそれは決して許されない行為。何故ならアイツは、もう……いないんだから。

「まあ……悪いとは言わないけど……って、一緒に過ごすう!？」
俺はその呼び名ばかりに気を取られていて、その言葉の中にあつたもうひとつの重要な事柄をすっかり忘れていた。

「はいっ！出てきてしまった以上、死ぬまでその人を受け持つのが私達の務めですから！」

拳を高々と上げて力説するティン。

……こうして、俺の最後の日は騒々しく幕を開けた……

そうかつこよく言つてはみたが、今日はもう半日が過ぎてしまったことは決して気にははいけないんだと思う。

。

そういう訳で、私はさっくんと一緒に町を歩いている。

ちなみに、私の方は姿を消してゆつくりと浮遊しながらついて行っている。本当はきつちり出現してさっくんの横を歩きたかったんだけど、さっくんに断固拒否されてしまいました。

「どこに行くんですかー」

私はさっくんに問いかける。出かけるときにも聞いたのだが、話してくれなかったのだ。

「……別に。どこか行くアテがあるわけでもないよ。学校には完全に遅刻だし、バイトも今日は休みだ」

「じゃあ何で出てきたんですかー」

「だから何でもいいだろう！少しは外に出ないと気分が落ち着かないんだから！」

怒鳴られてしまいました。ぐすん。

「あ、そうでした。あんまり私には話しかけないほうがいいですよー」

「何でだ……って、あ……」

そう言っただけならさっくんは顔を赤くして、今度はしゃべっても何も答えてくれなくなりました。一体私が何をしたっていうんですか、正しいことを言っただけじゃないですか！

まあ、そんなことを言ってもさっくん以外の誰かが共感してくれる訳でもないんですけど。

何だかんだで、さっくんは別にどこにも入ることなくふらふらと歩き続けるだけだった……

なんとなく外に出てきてしまったのはいいが、行く当てもない。

俺はただ意味もなく町を歩いていた。

さすがに昼時くらいとあって、人は多い。

「ねーねー、どうするのー」

横からティンが聞いてくる。

姿は消せるとのことで、最初は消えてもらっていたのだが、あまりに話しかけてくるし、それに応答したら俺は空気に向かって話しかけている変な人と見られてしまうわけで。

仕方なく俺が折れて普通に姿を現しているところだ。

……しかし、こう並んで歩いているとどうも釈然としない。

周りの人間はティンとすれ違うたびに振り返っている。

……そして同時に、俺へ殺意のような目線をご丁寧に贈ってくれる奴も珍しくない。

安心してください。別にコイツは俺の連れじゃありません。勝手について来ただけです。

「ねーえー、どーうーすーるーのおー！」

……さっきの言葉微妙に訂正。寧ろ赤の他人ということにしてほしい。

「あーもーっ！ うるさい！ お前が入りたいどこにでも入ってるから！」

俺がそう言つてやると、ティンは急に目を輝かせる。

「いいのっ!？」

「ああ、だから頼むから静かに……」

「やったーっ! 実はこの町、前にも仕事で来たことあったから、行きたいお店とかもうチェックしてあるんだあー! よーしっ! 早速行くよっ!」

「あつ! おい……はあつ、監視してるのはどっちだよ……」

俺は先に走つていったティンを呆れながら追いかけた。

「おい! 待てつての!」

さっくんが追いかけてくる。

ちよつと早く行き過ぎたかな?

「よーし! 着いたあ!」

私はひとつのお店にたどり着いた。

そこは、喫茶店。新しいところってわけじゃあないけれど、そこまで古いつて言うところでもない。

そして、私にとっては、《思い出の場所》。

《昔は》よくここで学校帰りに休憩してたよなーと、遅れてさっくんがやってくる。

止まると同時に肩で息をするさっくん。

うーん、運動不足なんじゃないかなあ?

「早過ぎだつての……そんなに急がなくてもいいだろ?」

さっくんはそんな感じで私に抗議をしてくる。

「さっくんの気分が変わつちやつたら駄目だもーん」

そう笑顔で言つてやる。

「そう簡単に……先言撤回するような男じゃねえよ……」

そう言いながらも、まだ肩で息をしている。

「まあとにかく! 疲れたなら余計に入るのが一番だよ! さ、入ろう」

私はそう言つて、さっくんの手を引つ張る。

「はいはい……っ！」

最初は引つ張られていったさっくんが店を見るなり突然手を離れた。その行為に驚いて何もできない私。

「どうしたの？」

「……わりい、この店だけは勘弁してくれ」

明らかな嫌悪感を感じるさっくんの言葉。

「えー？ なんでー？ このコーヒーおいしいんだよー？ それに先言は撤回しないってさっき言つたじゃん！」

さっくんつて《確か》コーヒー苦手じゃなかったはずなのに……

「……なんか外にいる気分じゃなくなっちまったから、帰るぞ」

「え、あ、待つてよー！」

結局、ホントに何もしないで家路につくことになってしまった（

まあ、《家路に着く》のはさっくんなんだけど）。

でも、なぜか帰り道の間、さっくんは一度も口を聞いてくれなかった……

今、俺は家の中で特にすることもなかったのその辺に乱雑に置いておいた雑誌でも読みながらボーっとしていた。

横ではティンがずつとぶつくさ言いながらテレビを見ている。

宣言を撤回するような男じゃないといったのに早速撤回してしまったからだろう。

でも、俺にとって、あそこは……

「お腹空いたーっ！ さっくーん、何か作つてよー」

「……適当になんか食つてろよ、棚の中にでも何かあるよ。あと態度がでけえ」

こいつは一応人の家にお邪魔しているということは覚えているんだろうか？

「えー、ここはさっくんの家なんだからさー、台所はやっぱ家主が使うべきだよー」

しかも既成食品ではなく手料理要求してきましたか。

「さっくんって、一人暮らししてるぐらいなんだから、料理得意でしょー？」

「あいにく俺は既成食品が主食なんで」

「でもさー、こういうかわいいお客さんが来たときくらい料理を振舞わなきゃ！　とか思わないのー？」

「俺は客と対等の立場で接しなくてはならないというのを心情にしているんで。あと自分をかわいって言うか普通？」

俺としては面倒なことはしたくなかったので、必死に反抗したが、

「うーっ！　私にはさっきの恨みもあるんだからねーっ！　料理作ってくれなかったら………炒める」

とか言ってくるものですから。つかこれ脅しだろ、あと炒めるって何をだ？

まあそれはともかく、このままでは何をされるかわかったものじゃない。

仕方なく俺は久々となる台所に立つことにした。

トン、トン、トン、と、包丁が鳴る音が響く。

私は部屋の真ん中にある小さな食卓の上に両肘をついてウキウキ気分で台所を見る。

台所ではさっくんがリズム良く野菜を切っている。

野菜は、最近料理してないから、と冷蔵庫に見事に葉野菜一つすらなかった状態のため私が買ってきたものだ（もちろん、私はお金なんて持ってないので、費用はさっくんもちです）。

買ってきてほしいといった野菜からしてさっくんは多分昔からお得意の《あの》料理を作ってくれるんだと思う。

私はその料理の完成を、まるで餌を待つ小鳥のようにじっと待っていた。

（そういえば……）

ふと、私はひとつのことが気になった。

（今のさつくんって……何か違う……前は結構人見知り激しかったはずなのに……しかも、それだけじゃなくて……何か、感じるものが……）

「おーい、何ボーっとしてるんだ？ 飯できたぞ？」

いけない、考え事に夢中になりすぎてたみたい！

見るとさつくんはもう手際よく二人分の取り皿と箸を並べていた。

「あ……えっと……」

「早く食えよ、冷めちまうぞ」

「あ……、うん……いただきます」

私はそう言っ箸を取り、料理に手を伸ばした……

「ごちそうさまーっ！」

手を合わせてティンが言う。

「はいお粗末さまでした……っと」

俺はそう言っ立ち上がり、見事に空になった皿の上に各々の取り皿を載せて、流し台に運んだ。

「しかし……すごいペースだったな……明日の朝食の分も考えて材料とか準備したはずだったんだが……」

確か俺は4人前のつもりで作ったつもりだった。だからかなり大きな大皿を使ったはずである。

なのに、今そのお皿は見事に空っぽだ。

「へへっ……こう見えても結構大食いなんですよー」

「威張って言うことが……」

「ま、それもそうですけどねー。あー食べたら眠くなっちゃった、さつくん、シャワー借りていいかな？」

「別にかまわねーよ」

ここで妄想したりするのがお決まりだとかどこかの友人がほざいていたが、俺はそこまで狂っちゃいない。

「それじゃあお言葉に甘えてー」

そう言ってティンは浴室の方へと入っていった。

「~~~~~」

ティンの鼻歌が聞こえる中、俺は先程の料理の皿を洗っていた。

昔ながらの水道とあって、お湯が出ないので、少々この時期では水が冷たく感じる。

かといってお湯でも今度は気温差で火傷しそうな気もするが。

（しかし……人一倍物を食うことといい、シャワーを浴びるときに鼻歌を歌うことといい……ホント、似すぎてるな……）

ティンに会ってから、アイツのことばかり思い浮かべている気がする

（もしかしたら……、いや、まさか……でも……可能性的には……）

「ふーっ、いいお湯でしたーっ」

するとティンがタオルを肩にかけて戻ってきた。服はさっきと同じものを着ている。

「ねえ……さっくん……」

ティンが俺を呼ぶ。

「何だ？」

「今日はさ……さっくんにとって最後の夜だから、一緒に寝よっか」

「別にいい……ってええええっ!？」

「あ、変なこと誤解しちゃダメダヨ? そうじゃないと私が寒いんだもん!」

ティンは少し赤くなって言う。

「……あ、さいですか。まあ確かに、最後の夜だし、こんなのもいいかな」

「きつまりー！　じゃあ私は待つてるから、もうシャワー浴びてきたら？」

「じゃあ、そうさせてもらうよ……」

そう言つて、俺は浴室のほうへと向かった。

豆電球だけがついた部屋の中、私とさつくんは、小さな布団に背中を向け合つて潜り込んでいた。密着するさつくんの背中が温かく感じる。

「なあ、ティン。人間つてのは……死んでしまつたら一体、どうなるんだ？」

突然、隣で寝ているさつくんが私に声をかけてくる。

「そうですね……天界の一般住人になったり、もう一度人生をやり直してみたいと、別の人間として生まれ変わったり……私のように、天界橋渡使となつたり……」

「ふうん……じゃあさ……、ティンはどうして、橋渡使になつたんだ？　何か理由でもあつたのか？」

「そ、それは……」

顔が赤くなつていくのが自分でもわかる。

私が橋渡使になつた理由、それは……他ならぬ、さつくんの為。

私がこの世を去つてから一番に考えたことが、さつくんと再び逢えるのか、ということだった。

私は、死んでからもさつくんと一緒にいたいという気持ちは変わらなかった。

でも、天界の住人になつたところでさつくんは私が天界の住人になつたことなど分かるはずもないから、他の選択をして、二度と会えなくなつてしまうかもしれない。別の人間として人生をやり直してさつくんと知り合える可能性にいたつては天文学的確率だ。

よく恋愛小説などでは「そういう絶望的状况を乗り越えてこそ」とはいっているけれど、とてもじゃないけど私にはそんなことは無理

だった。リスクのことを考えると、どうしても最悪の状況を想定してしまっていた。

そこで、私は天界橋渡使となることにした。そうすれば、さっくんのことを直接橋渡しする機会を得られるかもしれないと思ったのだ。確かに、今考えたら確率的にはほかの二つと何の遜色もないかもしれない。でも、そのときは、それが可能性が高いと私は思っていたし、何より、もし逢ったとしたとき、一番逢うのが早いからだった。

でも……

(そんなの……言えるわけないよっ……)

「ああ、無理だったと言わなくていいよ。単なる思いつきだし」
その優しいところは、昔から変わらないみたい。

「う、うん……じゃあ、逆にこっちから質問させてもらってもいいかな？」

「ん？」

「さっくんは……死ぬのが怖くないんですか？」

さっくんは一度ためらったような素振りを見せるが、すぐにこう答えてくれた。

「うーん……死ぬのは……正直なところ、少し怖い。でも、死ぬのは嫌だ、とかは思わないな。そんなにやり残したことなんて思いつかないし、親にも死なれている今、悲しんでくれる人がいるわけじゃないしな」

「そ、そう……ですか……」

「それに……」

「え？」

「死んだら死んだで、アイツに逢えるかもしれないしな！」

さっくんはこれまでになく明るい口調でそう言った。

「えっと……アイツ、って？」

「俺の幼馴染だよ、南原奏みなみはら・かなっていうんだ。ティンは、聞いたことな

いか？」

知らないはずがなかった。

それは……、私の……

「いいえ。天界は広いですから……」

嘘をついた。

本当なら、すぐにでも打ち明けたかった。

でも、まだ悟られてはいけない。橋渡使が担当した人間に生前のこ
とをで語るのは禁じられている。

「そっか……、アイツ……奏は底抜けに明るいやつだった。アイツ
の笑顔にも、何度か助けられた…… だけど、二年前…… 交通事故
で死んだ。居眠り運転のトラックが横断歩道前で待っていた奏に直
撃したらしい。病院に着く前にあっけなく救急車の中で死んじまっ
たんだ…… 最後まで、痛みとかで顔を歪めることなく、笑顔のまま
でな」

「……………」

「今日俺が入るのは嫌、って言った喫茶店があつたら、丁度あそこ
なんだよ。救急車に運ばれる奏が息を引き取ったのは……」

「そう…… だつたんですか……」

知らなかった。そうと知らずに私は……

「ああ、暗い話して悪かったな、もう寝よう」

そう言つてさつくくんは、豆電球を消し、目を閉じていた。
でも私にはもうひとつ、聞くことがある。

「さつくくん」

「ん？ まだ何かあるか？」

「さつくくんは…… 天界に行ったら、何になりますか？」

あまりにもシンプルな質問だった。

「そうだな…… 俺としてはどれでもいいけど…… やっぱり、天界橋
渡使かな？」

「ど、どうしてですか？」

「いや…… アイツ…… 奏と一緒にいたいからかな？」

「でつ、でも、その奏さんが天界橋渡使として天界にいるとは言いい切れないんじゃない……」

「ああ、確かにそうだな。でも、アイツは……間違はなくこの仕事を選んでいると思う。アイツはいつも笑顔だったけど、それは強がりなだけで、本当は寂しいのが嫌いなどどこにでもいるような普通の女の子だったんだよ。だからきつと……な」

そういつてさつくくんは最後の方ははぐらかしていたけど、やっぱり私のことはお見通しだったみたい。

「じゃあ……『KN 11』。これを忘れないでいてもらえますか？」

「『KN 11』？ 別にいいけど、何の意味が？」

さつくくんは不思議そうに首をかしげる。

「それが……天界へ行くさつくくんへの、私からの特別な手土産です」

「しかし、本当にあつけなかったなあ……」

俺は天界の町を歩きながらそう思った。

次の日、俺はあつけなく事故で死んだ。奏とは違い、救急車を呼ぶまでもなくその場で息を引き取った。

そして、俺は天界橋渡使となることを正式に取り決め、天界橋渡使の生活する集団住宅へと向かった。

……そして、俺は自分の場所ではなくある場所へとたどり着いた。

その部屋の番号は、『KN 11』。そして、その部屋の表札には、俺のよく知る人物の名前が記されていた……

「『KN 11』、か……。なるほど、そういうことか……」

俺は、迷うことなくその部屋の呼び鈴を押した。

Fin

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4679d/>

FINAL DAY～サイゴノジカンニナニオモウ……

2010年10月8日12時08分発行